



ちょっとそこまで～お散歩日和(植物編)～



イヌシデ



「紙垂」と書いて「しで」と読める人は、そう多くないと思います。素直に「四手」とも書くので、こちらの方が親切でしょう。神社など、神域と現世とを区分する結界に張られる注連縄に付く紙のことで



落雷が多い年は稲が豊作になると言い伝えられ、紙垂は稲妻をイメージし、邪悪なものを追い払う意味もあります。宮沢賢治も花巻農学校時代に、そんな話をしていたという記録も残されています。しかし、その起源は天岩戸伝説で



す。天照大神が二度と隠れないように岩戸の入り口に張り巡らした木綿や麻の糸が始まりで、「糸」の象形になっています。

さて、前置きはこれぐらいにして、今日の本題は、その「シデ」が名前についた樹木「イヌシデ」です。その実の姿が「紙垂」そっくりだからというのが由来理由ですが、どちらかと言えば、ミノムシに近く、「紙垂」をイメージするには少々無理があるような気がします。

ミノムシの話題が出たので少し触れておきますが、現在、ミノムシは絶滅の危機に瀕しています。外来種のオオミノガヤドリバエによる寄生が原因です。秋から冬の代名詞として、ありふれた景色だったと思いますが、そう言えば、最近とんと見なくなっと思いませんか。枕草子に「父よ父よ」とミノムシが寂しげに鳴く話が出てきますし、秋の季語にもなっていますが、今の子供たちは実物を見ずに育っているのではないかと危惧します。

もしも興味がある方がいらっしゃったら、光が丘公園管理事務所の西側に、東京には珍しい数本のライラック(リラ)が植栽されています。なぜか、ここにたくさんのミノムシがぶら下がっています。散歩がてら探してみてください。

イヌシデの話題に戻しましょう。集会室前に数本植栽されていますが、残念ながら当団地のイヌシデには実が付いていません。しかし、5号棟からスロープで下った、1号棟駐車場出入り口前のイヌシデは、今、たくさんの実を付けています。



花期は4月～5月頃、葉の展開と同時に開花します。1本の樹に雄花と雌花を付ける雌雄同株で、花の形状は雌雄とも花穂と言われる連なって垂れ下がります。雌花はビールの原料で知られるポップの形に似ていて、新梢の先に咲きます。雄花は稲穂状で、枝の途中につきます。

いろいろなサイトを閲覧した中で、千葉県野田市のホームページに、このイヌシデの解説をコンパクトにまとめた資料を見付けました。ここにそのままを引用させていただきます。



どうしてこんなに地味で特徴の乏しい樹木を庭木に好んで植栽するのかよく分かりませんが、比較的太い幹の素材を作りやすく、また小枝も育ちやすく面白い姿に仕上げられることか、盆栽には人気があるようです。

日本にはアカシデ、イヌシデ、イワシデ、クマシデ、サワシバの5種が分布しているようですが、どれもよく似ていて、ほとんど区別できません。雑木林にはありふれた木です。イヌシデの「犬」は、広辞苑にあるような「ある語に冠して似て非なるもの、劣るものの意を表す語。」という意味ではなく、アカシデではないという意味の「否」からの音便変化です。

最後になりましたが、光が丘公園けやき広場（図書館前）にクマシデがたくさん植えられています。そして、ちょうど今、たくさんの実がたわわにぶら下がっています。何も知らなければそのまま行き過ぎるでしょうが、ちょっと立ち止まって、そのミノムシ風な佇まいを楽しむのも一興ではないでしょうか。



(終)